

陳 述 書

2019年6月 20 日

原告 石丸穂澄
住所：長崎県東彼杵郡川棚町

第1 はじめに

こうばる地区の水没予定地で生活をしている石丸穂澄です。私は、今、こうばるの家で両親と祖父と生活しながら、こうばるの自然を絵に描いています。私は、双極性感情障害Ⅱ型という精神疾患を患っていて、別の場所で暮らすことは不可能に近く、今のこうばるでの生活を失うわけにはいきません。加えて、こうばるは私のふるさとであり、守るべき自然が残っています。無意味なダムで、私のふるさとと、平穏な生活を奪わないでください。

第2 私とこうばるの歴史

- 1 私は、1982年11月5日にこうばるで生まれました。6歳年上の兄と3歳(4学年上)年上の姉がいる3人兄弟の末っ子で、祖父母に父と母、叔母(父の妹)の8人家族でした。

地元にある、みのり幼稚園、石木小学校、川棚中学校に通い、表向きは普通の生活を送っていました。家の中で遊ぶのも外で遊ぶのも好きでした。幼稚園に行く前は、家の中ではらくがきやままごとなどのひとり遊びをして過ごし、外では自宅の庭先で遊んでいました。少し大きくなると家の裏の山や田んぼや畑、石木川で遊びました。兄や姉に連れて行ってもらって遊ぶこともありまし、一人で三輪車にのって近所の同級生の家に遊びに行くこともよくありました。

小学生くらいになると、裏山や防空壕に秘密基地を作って遊びました。日が

暮れるまで基地をつくり、かずらの蔦でターザンごっこをやりました。水路でおたまじゃくしを捕まえたり、イモリを釣ったりして毎日遊んでいました。

2 子どものころは、石木ダムについてはほとんど知りませんでした。

石木ダムの強制測量が行われたのが1982年5月で、私はまだ生まれていなかったのです。強制測量の後、長崎県は、表向きは静かになり水面下での切り崩しをしていた時期だったようで、私は、自分が住んでいるところにダムができることも、自分の家がダムに沈むことも想像すらできませんでした。ただ、「ダムは要らない、絶対反対！」が近所の子どもたちの合言葉でした。石木小学校でも、ダムの話は特に出ないのですが、出た時にも「要らない！反対！」とほとんどの子が無邪気に言っていました。

小学校5年生くらいの頃、当時国会議員であった金子原二郎氏（のちに長崎県知事になる人です）がこうばる公民館にあいさつにやってきたということがありました。私はそこには行かなかったのですが、後日、その時の様子を近所の男の子が、「「あいつが俺らの前にやってきて、君たちの未来は私たちがしっかり補償するから安心したまえ」なんていうから、みんなで「そんなもんは要らん、帰れ帰れ」って言ってやった」と言っていました。

このころは、ダムに反対することが当然で、ダムなんて要らないという意識が自然と共有されていました。誰もが、「石木ダムなんて絶対できない」と思っていました。

3 高校に進学する際、私は、どうしても美術系の高校に行きたいと思い、長崎日本大学高等学校のデザイン美術科に入学しました。入学当初は、芸術を仕事にしようなどとは考えておらず、ただ作品を作りたいという欲求のまま作り続けていました。そんな中、高校の先生から美大への進学を勧められたことから美大進学を考え、放課後は高校でデッサンの練習に励み講評を受けたり、夏期講習を受講したりしました。

しかし、大学受験が近づいた高校3年生の頃から、受験のため、大学合格の

ための作品制作への違和感やプレッシャー、遠方の予備校での授業など環境の変化に適応できず、嘔吐や下痢、発熱、不眠といった症状が出はじめました。

結局、その年の大学合格はあきらめ、高校卒業後、姉と一緒に住めるからということで、名古屋にある美大進学系の予備校に入学しました。しかし、ここもわずか10日通っただけで学校にも指導される絵の内容にもなじめず体調を崩し、通うのを辞めてしまいました。何をしたらいいのか分からず日々を過ごしていました。そんな、田植えが終わった頃のある日の夜、実家から母が心配して電話をかけてきてくれました。その時、母の電話の後ろから、シャワーのようにカエルの鳴き声が降り注いできました。それを聞いたとき、突如、「ああ、これだ!」と思いました。私が居たい場所はその場所なんだと思いました。

その後、姉の卒業に合わせて名古屋から実家のこうばるに戻ってきました。

- 4 ただ、実家に戻ってきても体調は良くなり、不眠、嘔吐、下痢、発熱といった症状が続きました。そこで、母の説得で大村共立病院が開設していた「大村・歯と心の診療所」を受診したところ、初めてうつ病との診断を受けました。

当時は、うつ病に対する社会の理解がなかったことから、なんとか実家から通いながら働こうとしましたが、働き始めると体調を崩すということを繰り返し、そのたびに病院に入通院するということの繰り返しでした。そんな中、主治医が変わったことにより、双極性感情障害Ⅱ型の疑いが生じました。

その後、2006年ころに再度長崎市内で一人暮らしを試みましたが、6か月程度で断念せざるを得なくなり、2か月間入院することになりました。

退院後実家に戻りましたが、翌年6月ころからの実家の大掛かりなリフォーム工事の際には、工事のストレスで体調を崩し数週間ほど入院することになりました。このころは、「不安」と「焦燥感」で意識がある状態がとにかくつらく、最高量の薬を処方してもらい、なんとかやり過ごしていました。

- 5 それでも実家での生活を続けるうちに最悪の状態を脱しかけていたころ、2010年3月、突如石木ダムの付け替え道路工事が着工しました。

それまで、私は、自分の体調のことで手一杯で石木ダムの問題がどのようなになっているかを意識することはできなかったのですが、道路工事が着工したため、私の生活に否応なく石木ダム問題が入ってきました。両親と祖父母が、付け替え道路工事に対する抗議行動に参加することになったため、家事のほとんどを私が請け負うことになり、生活の変化で不安定な精神状態に大きなストレスを受けて体調を崩しかけました。

この時、どうしてこんな目に合わなければいけないのか、平穩に生活できないのかと思い、石木ダムについて調べ始めました。そうすると、すでに父の世代から、根拠に乏しい、必要のないダムだと言われていたことが分かりました。そして、自分なりに調べても、その父たちが言っていることの方が正しいのだと思いました。子どものころは、なんとなく「要らない」と言っていただけでしたが、この時から、本当にダムは不要なのだと私なりに根拠をもって言うことができるようになりました。

第3 石木ダム反対の活動について

- 1 そこで、私の住処をダムに沈めるわけにはいかないとおもい、まずは多くの人に石木ダムの問題があるということを知ってもらうため、私なりにできることを考え、「こうばる通信」というフリーペーパーを発行し始めました。

「こうばる通信」に描いたのは、こうばるの自然と環境のすばらしさや、こうばるでの生活についてです。

こうばるに流れる石木川は、源流は虚空蔵山で、とても水のきれいな清流です。水生生物の中でも川魚は特に多く、一例をあげると、ヤマトシマドジョウ、ニホンウナギ、カネヒラ、オイカワ、ムギツク、カマツカ、イトモロコ、カワムツ、ドンコ、ギンブナ、ナマズ、アブラボテ、タカハヤ、カワヨシノボリ、オオヨシノボリ、ドジョウ、ミナミメダカ、シロウオ、アユ、コイ・・・と挙げきれないほどの川魚が住んでいます。

小学校5年生の時、川棚川で水生生物を調査するワークショップが行われ、

同級生全員で参加したことがありましたが、思ったよりも捕まえられず、普段から石木川で川の生き物を見ていた私としてはとてもつまらなかった記憶があります。

その川では、今でも小中学生の子どもたちが、魚を捕まえたり、夏には川遊びをしています。パワフルな中学生は川の深い場所めがけて橋から飛び込み、小学校低学年くらいの子たちは浅瀬で泳いでいます。

- 2 2011年6月からは、石木ダムが不要である理由をわかりやすく伝えるため、漫画で石木ダムの問題を表現した「ダムのツボ」という漫画小冊子を作り始めました。「ダムのツボ」は2013年11月ころに完成し、2014年2月にはダムのツボ出版記念展をアルカスさせぼで開催しました。この様子は、各報道機関も報道してくれました。

「ダムのツボ」には、①佐世保市の人は本当に水に困っているのか、②本当の治水とは何か、③石木ダム建設は市民の願いなのか、④放置されてきた漏水問題がある、⑤佐世保市の人口は減少する、⑥工場揚水は激増するのか、⑦大村湾への影響はないのか、といった問題点を描きました。これらの問題点について、納得のいく説明を長崎県からも佐世保市からもしてもらっていません。

「ダムのツボ」を描きながら、私はますます、石木ダムは要らないダムだと思いました。

2013年からは、石木ダムについての初めてのブックレット「小さなダムの大きな闘い」を作るということで、私もイラストとこうばるの紹介のページを任されて担当しました。

他にも、石木ダム問題について支援をしてくれる方を増やそうと、川魚うちわや缶バッジ、ステッカー、絵葉書などの石木グッズを作ったりもしました。

- 3 そんな活動を続けているとさまざまな方に石木ダムの問題を知ってもらう事ができました。

「こうばる通信」は、長崎テレビで取り上げてもらいました。「ダムのツボ」

を作ったことで出版記念展を開催でき、報道機関に記事にしてもらいました。

2014年11月には、世界的なアウトドア用品を製造販売しているパタゴニアの日本支社から石木ダム反対運動の支援をしてもらえることになりました。

その後も、いとうせいこうさんや伊勢谷友介さん、小林武史さんが石木ダム問題を題材にトークイベントをしてくださったり、山田英治監督がこうばるを題材に「ほたるの川のまもりびと」という映画を製作してくれ、その上映が全国各地で行われています。

2018年には、ニュースザップというテレビニュース番組で詩人のアーサー・ビナードさんが石木ダム問題を取り上げてくださった時にゲストだった加藤登紀子さんが、石木ダムについてコメントをしていたのがきっかけで直接お手紙を書き、川棚町公会堂で加藤登紀子さんや元滋賀県知事の嘉田由紀子さんを招いて1000人集会を開催することもできました。

私も、話せる機会があればどこにでも行き、話してきました。新聞やテレビと言ったメディアだけでなく、ピースボートに乗船して石木ダム問題をアピールしたり、ラムサールネットワークの日韓交流会議で韓国釜山に行き石木ダム問題のスピーチをしたりしました。

ただ、どうしても病気と体調についてはどうしようもないところがあり、これらの活動中も、不眠で数日間寝られなかったり、下痢と嘔吐を繰り返したり、発熱したり体調を崩したりは頻繁にありました。それでも、私は、無理をしても活動を続けてきました。これも、少しでも多くの方々に、石木ダム問題を知ってもらいたい、こうばるをダムに沈めてほしくないという思いからです。体調を理由に何もやらなかったら私のふるさとがダムに沈んでしまうという焦りと不安で、やらざるをえないのです。

第3 石木ダムにより失うもの

- 1 こうばる通信や「ダムのツボ」を発行すると、それを読んだ方が感想など連絡をくれることがありました。実際にこうばるに来てくれた方もいました。

口々に、こうばるは良いところだと言ってくれ、こうばるを無くしたくないと言ってくれます。こうばるはたる祭りも、毎年来場者が増えています。

川棚町や佐世保市で、ここまで人が集まるイベントを毎年できる場所はほとんどありません。それなのに、この貴重な観光資源を川棚町は活かそうとしていません。

また、川棚町は現在、戦争遺構（三越地区、片島の魚雷発射試験場跡地）に公園を作ってイベントを市民が自発的に取り組んで盛り上げていこうとしています。実は、石木ダムの水没予定地内にも重要な戦争遺構があります。終戦末期に、海沿いにあった軍需工場を、祖先から土地を強制収用して移転させた軍需工場跡地です。ですから、本来であれば、片島とこうばる地区の戦争遺構は2つで1つのセットとして語られるべきですが、こうばるの戦争遺構には行政はスポットを当てません。

また、川棚川を「シーボルトの川」と言い出したのはそもそも長崎県だったはずなのに、川棚川本流よりも多くの川魚や水生生物がいる石木川には注目しようとしません。

石木ダムの建設に都合が悪いので、意図的に注目しないようにしているのだと思います。

ですが、ダムが完成した途端、石木ダムも川棚町も佐世保市も、経済的にも社会的にも終わると思います。

利水として石木ダムの水はほぼ使われずに水道料金だけが上がります。洪水対策としても限定的な効果しかありません。長崎県土木部河川課の職員に、2018年7月7日に起こった愛媛県の肱川での洪水について、「あのような雨に石木ダムは耐えられるのか」と聞いても答えられませんでした。さらに、石木ダムによっては川棚町中心部の内水氾濫は防げません。

そもそも、石木ダムを造った後に川棚町が何も金銭的な負担をしなくていいはずがありません。現実には、ハッ場ダムの現地では、ハッ場ダムのために作ら

れた周辺の関連施設の維持管理は結局ダム完成後に地元が費用負担をする
ことになっています。石木ダムも、これから公園などの施設を作っていく予定の
ようですが、完成したら川棚町が維持管理費を負担しないといけなくなるはず
です。

そうすると、川棚町は、人は集まらず、ダムを造ったために増加する費用を
負担するはめになります。そこから先に待つのは川棚町の衰退しかありません。

- 2 長崎県や佐世保市は、私たち水没予定地区の住民に対して、代替地を用意し
たからそこに移ればよいといいます。しかし、私のような精神疾患を持ってい
る患者に対し、住み慣れた環境を離れろというのは、体調を崩して入院するか
最悪死ぬ可能性もある、酷な要求です。

精神疾患を持つ人に対しては、その人を取り巻く環境に理解と配慮が必要で、
私の場合は特に、うつ傾向が1年の内の3分の2を占めており、その間は人工
的な「音」や「視覚的な刺激」に強いストレスを感じます。都市部での生活は、
間違いなく不適応を起こします。

これまで、何度か一人暮らしをしたり、都市部に住んだりしていますが、そ
の度に大失敗し、入院したり実家に戻って来ざるをえませんでした。実家のリ
フォーム工事ですら、ストレスで体調を崩していました。

この状況で、付け替え道路工事が強行され、私の家の裏に重機が入ってき
たら、一体自分の体調はどうなるのかと、不安でなりません。

私にとって、石木ダムができること、実家が沈むことは、このように自分の
身体と健康に直接害をなすものでもあるのです。

そのため、今、少し体調を崩したとしても、一生懸命反対をしています。私
には、こうばるでの自然の音に囲まれた落ち着いた静かな環境がどうしても必
要なのです。

第4 最後に

「ダムのツボ」の最後に、私は、「石木ダムは実現するの？」というコラム

を描きました。行政の人たちは、ダムはいつかできているかもしれません。ですが、こうばるのおじちゃんたちも、おばちゃんたちも、おばあちゃんたちも、若者も、13世帯60人近い住民が反対し、これからも反対し続けます。こうばる地区の人々の団結は崩れません。

そして、今では、全国にこうばるのことを知ってくれ、石木ダムは不要であることを知ってくれている多くの人々がいます。

自分のふるさとを守るため、そして、自分の命を守るため、私はこうばるに居続け、イラストを描き続けます。ただ、願わくば、一刻も早く、こうばるで安心して暮らせるようになりたいです。

以上